

啄木ゆかりのカルタ寺

本行寺の門信徒会報

— 来た道・ゆくと道 —

第86号

2026年1月1日



ホームページ

 本行寺門信徒会 釧路市弥生2丁目 TEL 41-5329
<https://hongyouji946.com/>
 E-mail hongyouji@poppy.ocn.ne.jp


明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

巻頭の写真は昨年11月23日に行われた本堂・旧納骨堂国指定有形文化財登録記念事業の中で演じられた詩劇「啄木アンソロジー in Kushi-roの夜」の一場面でございます。

啄木の詩(17作品)の朗読とひとり芝居で啄木の生涯を再現した詩劇で釧路演劇協議会顧問の星光二さんが作・構成・演出を下さいました。私も劇の中で岡西と一緒に出演させていただきました。始まる直前は私も岡西も大変緊張しておりましたが、上演が始まると啄木の生きた明治にタイムスリップしたような不思議な感覚となり啄木の詩が私の心にすっと入ってききました。啄木の詩の素晴らしさをあらためて感じさせられるひとときとなりました。

さて、今回の催しには200名を超える皆さまにご来場をいただき文化財登録への関心の高さがうかがえました。この事業は啄木研究家の北畠立朴先生はじめ釧路文学団体協議会、釧路演劇協議会、元町青年団など多くの釧路市民有志の皆様が企画立案と当日の運営にいたるまで担当を下さいました。お手伝いして下さった皆様は口を揃えて今回の文化財登録を「嬉しい」「釧路の宝」「釧路の誇り」と仰って下さ

新年のご挨拶


 本行寺 住職
 菅原 顯史

釧路組 仏教女性会連盟 秋の合同研修会

戦後80年特別企画

「被爆体験伝承講話」 ～紙芝居で語る家族証言～

講師：長崎被爆協・被爆二世の会
長崎初代会長 佐藤 直子さん
2025年11月7日 本行寺本堂



皆さん、こんにちは。本行寺坊守、菅原麻子です。新年あけましておめでとうございます。

二〇二五年は、戦後八〇年目の年でした。この節目を迎えまして、戦争の悲惨さや平和や命の尊さについて考え、戦争の記憶を決して忘れないために、去る二〇二五年十一月七日に釧路組仏教女性会と総代部が合同で研修会

を開催しました。当日は六十名以上の方のご参加がありました。ご講師として長崎より被爆二世の佐藤直子さんをお招きしました。直子さんの父池田早苗さんが十二歳の時買い出しに行く途中、爆心地から2kmの長崎市小江原町で被爆したそうです。爆心地から800mの自宅に残っていたきょうだい五人は原爆投下から十日間で全員亡くなり、その後ご両親も原爆症で死亡。この被爆体験の語り部を三十年以上続けてきたお父様でしたが、二〇一九年五月十六日に八十六歳で他界。その後、この体験を

次世代にも語り継ぐため、直子さんが活動に尽力されているそうです。教科書やTVで見聞きするのと違い、生の体験を聞くのは初めてだったので、心に響くものがありました。本場の戦場の姿を知らなかった私だと気づかされました。今この瞬間にも、世界各地では武力衝突や紛争が絶えません。私達浄土真宗門徒は、決して当たり前じゃない『おかげさま』の命を生かさせてもらっていると知っています。この命の尊さや、平和のほんとうの大切さを日々お念仏を申しながら子や孫にと紡いでいきたいと思います。

いました。本堂に有難いことです。これからは「コミュニティセンターとしての佛寺」という存在が求められる時代になっていくのではないかと考えております。その先駆けとして本行寺では宗派を超えて開催している「元町おてら食堂」、すべての子どもを対象とした「キッズサンガ子どもの集い」、誰でも参加できる「恋活IN本行寺」など地域社会に貢献、そして還元するイベントを開催して参りました。これからは釧路の寺社仏閣では唯一無二の文化財という特性をフルに生かしながらさらに地域の皆様に貢献できるように努めて参ります。

新年のごあいさつ



本行寺門信徒会 会長 治 顯
本門 種市

明けましておめでとうございます。会員の皆様におかれましては、ご健勝にて新春を迎えられたこととお慶び申し上げます。昨年は会の運営にご協力ご支援をいただき厚くお礼申し上げます。本年も

よろしくお願い申し上げます。昨年は、本行寺にとっては記念すべき一年でした。本堂、旧納骨堂が国の有形文化財登録されたこと、前庭用地を、樹木葬庭園「花楽苑」として開園したこと、この二つがあげられることと思います。さらに、記念事業として、地域の元町青年団、元町フットパス広め隊を中核とした実行委員会主催のイベント（詳細は別記）の実施等がありました。記念講演、佐渡おけさ踊り、詩劇の上演、用意した一七〇席は空きのない程に席が埋まり、盛大なイベントになりました。ご尽力いただいた地域の皆様には感謝申し上げます。

ところであります。私たち門信徒としても喜ばしい年であったといっても過言ではないと思います。これからは、更なる発展と、護持にばげまなければならないと思うことであります。お寺は、先祖の御霊にお詣りすることだけではありません。常例法座や研修会、教化団体の集会等を通じて「学びあい語りあい」ながら「つながりを深めあう場」です。ご門徒の皆さま進んでそれらの集いに参加しましょう！「南無阿弥陀仏」を唱えながら仲間との絆をつよめましょう！ 合掌

宗祖 報恩講法要 二〇二五年十月十六日

院代 相 撲 浩 心

昨年も新型コロナウイルス以来続いております日程で、院内だけのお勤めでした。

法要はご満座法要と永代経法要を併せて一座法要の報恩講法要となりました。

御講師の先生は十勝清水町の壽光寺住職増山直樹氏をお迎えしました。壽光寺は、本行寺のご門徒で書道家であり浄土真宗本願寺派の僧侶でもありました、亡き石原行雄先生の奥様石原昱

枝さんのご自坊との事でご縁を感じしました。

報恩講のご満座法要と併せて行われた永代経法要では一年間にご往生なされたご門徒の方々のお名前を聞くと様々な思いが甦りました。特に総代・婦人会会長をされた山本妙子さんがお亡くなりになった後、月忌参りに伺うと、婦人会に入っていない方々が「本

当にやさしい方でとても残念」という山本妙子さんのお人柄を偲ぶ声が多く

皆さんよく知っているお話ではありますが、迫真の語り口にすっかり引き込まれてしまいました。

本堂という場所でもあり、どんな人間でもお救い下さろうとす

るお釈迦様のお慈悲を、お話の中で感じる事が出来ました。

* 報恩講記念公演 *

ひとり語り「蜘蛛の糸」

語り/植田 研一 篠笛/山口 千那



ありました。私も何度か地方の研修会など車で移動中いろんなお話をさせていただいたのを思い出します。

生者必滅（生きているものは必ず死ぬこと）会者定離（出会った人とは必ず別れること）愛別離苦（愛しき人とも必ず別れなければならぬ苦しき）

おかげさまの心

広報部 山本悦也

十月十六日、報恩講の法要があり、十勝組清水町壽光寺の住職、増山直樹師の法話をいただきました。壽光寺は洪沢栄一翁が建立したお寺で、洪沢が揮毫した「青淵山」という扁額を掛けている由緒あるお寺です。

法話は「おかげさまの心」という題です。「おかげさまの心」は、他人の支援やめぐみに対する感謝の気持ちを表す言葉です。しかし、日々の暮らしがお陰様で成り立っていると言われるのも、なかなか実感がわきません。

インターネットを検索すると次のようなことが出ていました。

「〇〇のせい」から「〇〇のおかげ」に言い換えることで、人生が豊かになって幸せになれるというのです。

・時間が無いせいで好きなことができない↓自由時間が少ないおかげ

を、あらためて思い知らされました。来年こそは通常の報恩講ができるよう、願っております。

今年お参りに来られた方も、来られなかった方も、来年の報恩講には是非お参りくださいますようお願い申し上げます。



で、好きなことをできた時に最大の喜びを味わえる


・お金が無いせいでやりたいことができない↓お金が無いおかげで、物を大切に無駄遣いをしない

・子どもがいるせいで自由な時間が無い↓子どもがいてくれるおかげで、毎日が充実して幸せを感じられる

最後に「日常で実践できれば、まるで暗闇から光が差し込むように、幸せな世界が広がっていきます」とまとめ

損得勘定で生きている私たちは、「おかげさまの心」を持つことがどんなに大切だということがわかります。

記念事業



本行寺本堂・旧納骨堂
国有形文化財登録
記念事業
2025年11月23日

記念講演「本行寺の文化財登録」
神戸情報大学院 大学客員教授 川島 智生

奉 納 鉚路新潟県人会による「佐渡おけさ踊り」 踊 若柳 吉澄奈 社中

詩 劇 「啄木アンソロジー in Kushiroの夜」
作・構成・演出 星 光二

講 演 「啄木と本行寺」
鉚路啄木会 会長 北 島 立 朴



「本行寺の文化財登録」川島智生教授

令和七年十一月二十三日に記念事業実行委員会の主催によって行われた内容を紹介します。この事業は、記念講演・奉納・詩劇・講演の部門で実施されました。

記念講演は、神戸情報大学院の川島智生客員教授が、近代建築史を専門に寺文化財指定や登録を担っている立場から、本行寺の建築について調査をすることになりました。

この度は、文化財登録に至った経緯から始まり、本堂の特徴は、和風を基調とした和洋折衷建築であり、防火対策として「札幌軟石」を使っていること、本堂の屋根裏調査で見つけた「棟札」から新潟県間瀬大工と呼ばれた職人による、高い技術が駆使された工法による構造であること、

と、特に、本堂玄関ひさし部分の木鼻装飾が木彫ではなく、モルタルを使った珍しい彫刻であること等々が登録文化財として価値あること、道内ではごく希少な価値のある建築物であると語られていました。

奉納は、本行寺の建築に当たった大工の皆さまが新潟県西蒲原郡間瀬村出身「間瀬大工」と呼ばれた大工集団であったことから、出身地になんで鉚路新潟県人会により、若柳吉澄奈社中の皆様による「民謡 佐渡おけさ踊り」でした。普段は、触れることの少ない機会に恵まれました。

「詩劇 啄木アンソロジー in 鉚路の夜」は、啄木の作品をとりいれ、



「佐渡おけさ踊り」若柳吉澄奈社中

苦悩の生活を表現した詩劇でした。構成演出をされた作者の星光二氏が進行と解説を担当し、学生演劇集団の野々山実月さんが啄木役で出演。劇中、和歌の唱和役として菅原住職と岡西法務員が出演されました。

明治十九年に生まれてから志を持って上京し、困窮した生活から病に伏して生家につれ戻り十六歳で啄木を号した。

結婚後小学校の代用教員に。職を失って北海道へ渡り新聞記者となった。函館、札幌、旭川と経て鉚路での生活が始まった。

新聞記者として腕をふるい酒に親しみ、宴会後に本行寺の「歌留多会」に参加した。その後「文学に生きる」を



「啄木アンソロジー in Kushiroの夜」

再度心に決め、上京し朝日新聞社に籍を置くが、肺結核を患い人生に終わりを告げた。

啄木明治四十四年作の「呼子と口笛より」「飛行機」の詩が劇の始まりと終末にながれていました。

出演者の熱演と内容の濃い詩劇に参観者の皆さんは感動していました。

イベントの締めは、啄木研究者で本行寺啄木資料館館長北畠立朴さんの「啄木と本行寺」をテーマに啄木の釧路での暮らしぶりを語られました。

釧路での暮らしの中で酒を親しみ、芸者「小奴」と親しくしたほかに柳川という女性と交友関係にあったこと、どちらかと言うと「柳川と



いう女性が本命である。」と語られたことは今まで耳にしたことがないことでした。

啄木は宴会後しばしば行われていた「本行寺」の「歌留多会」に出向いたことから本行寺との関わりがうまれたそうです。

女性関係と借金の多い釧路での生活であったと結ばれました。



「啄木と本行寺」北畠立朴会長

このイベントを通してご尽力をいただいた地域の皆さまと関係機関団体、ご後援いただいた皆さまに感謝とお礼を申し上げ、イベントの報告とさせていただきます。

門信徒会長 種市 記



法味一言

飛行機

「見よ、今日も、かの蒼空に
飛行機の高く飛べるを。」

給仕づとめの少年が
たまに非番の日曜日、
肺病やみの母親とたった
二人の家にて、
ひとりせつせとリイダアの
独学をする眼の疲れ……
見よ、今日も、かの蒼空に
飛行機の高く飛べるを。」

石川啄木詩集

「呼子と口笛」より

●門徒僧侶合同研修会●

(仏教壮年会研修会併修)

お聖教を学ぶ 公開講座

「大經のころ」

◆日時 令和8年2月4日(水)

午後1時から午後2時半頃まで

(受付午後1時 開会式午後1時15分)

◆場所 本行寺(釧路市弥生2-11-22)

◆講師 本願寺派輔教・行信教校前校長・

常見寺住職利井 唯明先生

◆受講料 無料(どなたでも参加出来ます)

寺子屋 子どもの集い

子どもの集い担当
岡西 慶照

令和七年七月三十、三十一日に本行寺において、寺子屋子どもの集いが開催されました。今年は昨年よりも多く、五十五名の子供さんに参加してもらいました。

コロナが明けてから、年々参加人数が増えており、たくさんの子供さんに参加してもらえることが、スタッフとしても嬉しく思います。

また、昨年に引き続き、今年も九州の「遊びの研究所」より中島 宏先生をお招きし、先生にはゲームを担当していただきました。

特別な物を用意しなくても、身近にあるもので面白いゲームができるという事を、子供さん同様に、スタッフも実感しました。

チーム対抗で体を動かすゲームや、頭を使うゲームなど、汗をかきながら楽しむ子供さんの姿を見る事ができて、開催できてよかったと思えました。

他にもバーベキューやきもだめし、花火など、二日間通して楽しんでもらえたのではないかと思います。

また、楽しみの中にもほとけさまの教えに触れてもらえたことも、大きな成果であり、これからも継続していきたいと感じております。

今後このようなご縁はもちろん、青年層の方々にも気軽ににお寺に足を運んでもらえるようなご縁づくりに、青年会一同、取り組んでいきたいと思っております。

合掌

●小学二年 加賀谷 鈴 朱

さいしよは、みんなとねるのがよかったけど、みんなと、いっしょにねれてよかった。友だちは、さいしよは、すくないと思うけど、みんなと友だちになれたし、友だちもいて、ようちえんのお友だちとあえたり小学校の友だちもいてよかったよ。♡

♡ らい年3年生になってもまた友だちとやくそくしたから、らい年もくると思っています。らい年もさらい年もこれるときは、きます。

♡ タごはんも朝ごはんもどつちもおなじくらいおいしくて、どちらもおにえにまけないくらいでした。♡ ☆

●小学三年 すがわりりようけん

す。ぼくが一番楽しかったことは、休み時間にやったバスケットボールです。

理由は、友達やいろいろな人とやれるからです。あと、きのうの花火を見たことです。

理由は、いろいろな大きな花火の花火を見れたし、家でもこんな花火を出るんだなと思えました。

●小学五年 佐藤 湊 斗

二日間すごしてみると、新しい友達が増えて、新しい体験もできて、とてもきょううな二日間でした。



焼き肉やカレーもすごくおいしくて、すごくお寺にとまれたことに感謝しています。とくにおもしろかったのは、きも試しです。とてもビックリして、わらって一番お寺の中で楽しかったです。

●小学五年 長岡 舞衣

初めて、寺子屋に来て思った事と分かった事は、まず、スタッフのみなさんがやさしい、またはおもしろい事です。

二つ目は、お寺でもきもだめしをやると、本当にゆうれいが出そつで、ものすごくこわい事です。

最後の三つ目は、みんな年関係なく友達になれる事がいいな、と思いました。

編集後記

数年前、本家の叔母が亡くなったとき、仏壇から曾祖父の家族全員（五男一女）の集合写真が出てきた。そこには、「大正統年度、国勢調査記念 山本家、砥の川・本家全員デス」と各自の名前と年齢が書かれていた。

大正九（一九二〇）年は、第一回国勢調査が大規模に行われた年である。今も同じ西暦が五の倍数の年の十月一日に実施された。みんな着物を着ている。曾祖父五十三歳、曾祖母四十七歳。次男の祖父は二十二歳で羽織・袴をきちんと身につけている。十一歳の末っ子は袴に緋の着物を着て、下駄を履き、制帽をかぶっている。紅一点の二十歳の長女は日本髪を結っている。曾祖父一家は明治三十八（一九〇五）年、日露戦争が終わった年に徳島県から余市郡仁木町砥の川に入植し、果樹園をやっていたようだ。以前、父の代（三代目）のいとこ会で徳島に「先祖供養の塔」を建てたおり、お参りに行ってきた。自分も代々続く「命のバトン」を受け継いだことを実感した。



今はこの百年前の写真の曾祖父母、祖父、祖父の兄も本行寺の納骨堂に安らかに眠っている。（山本悦也）